『徒然草（つれづれぐさ）』の基礎知識（きそちしき）

『徒然草』は**鎌倉時代（かまくらじだい）**末頃（ごろ）の**兼好法師（けんこうほうし）**による**随筆（ずいひつ）**。筆者は鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての歌人で、出家し、兼好法師とよばれる。

『徒然草』には、古い時代への憧れ（あこがれ）や仏教の**無常観**を背景に、社会や人々に対する鋭い（するどい）批評が筆者の見聞を通して記されている。『枕草子（まくらのそうし）』と並んで、代表的な随筆文学と評される。

『徒然草』冒頭（ぼうとう）

①つれづれなるままに、②日暮らし硯（すずり）に向かひ(イ)て、
硯に向かって、
心にうつりゆく③よしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、
心に浮かんでは消えてゆく　何というあてもなく書きつけていると、
あやしう(シュウ)こそものぐるほし(オ)けれ。
妙に心騒ぎがすることである。
（序段）

1200　『新古今和歌集』
『方丈記』
『平家物語』
鎌倉
1300
『徒然草』

古文の特色

●係り（かかり）結び

古文には係りの助詞とよばれる語があり、文中で係りの助詞が用いられると、文末などの結びの部分が変化する。これを**係り結び**といい、感動や疑問などといった気持ちを強調する働きがある。

・係りの助詞
「ぞ」「なむ」「こそ」…前の語の強調
「や」「か」…………疑問・反語

（例）「山までは見ず。」と言ひけり。
「山までは見ず。」と**ぞ**（係り）言ひける（結び）。（前の発言が強調される）
尊く　おはしけり。
尊く**こそ**（係り）おはしけれ（結び）。（「尊く」が強調される）

●古文の文末表現

古文には、現代では見られない文末の表現がある。
「～けり（～た、～たそうだ）」・「～たり（～た、～ている）」
「～なり（～だ、～である）」・「～ぬ（～た、～てしまった）」
「～ず（～ない）」

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文の（　　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『徒然草』は（**A**）の末頃に（**B**）によって書かれた（**C**）である。

ア 平安時代　**イ** 鎌倉時代　**ウ** 室町時代
エ 鴨長明（かものちょうめい）　**オ** 兼好法師　**カ** 藤原定家（ふじわらのさだいえ）
キ 歌集　**ク** 軍記物語　**ケ** 随筆

A［　　］　**B**［　　］　**C**［　　］

(2) ——線①「つれづれなるままに」とあるが、これはどのような様子か。適当なものを選びなさい。

ア 忙（いそが）しく、落ち着かない様子。
イ 硯に向かって集中する様子。
ウ 何もすることがない様子。

［　　］

(3) ——線②「日暮らし」の意味を選びなさい。

ア ある日　**イ** 一日中　**ウ** 夕方

［　　］

(4) ——線③「よしなしごと」の意味を選びなさい。

ア 大切なこと
イ とりとめもないこと
ウ 良くないこと

［　　］

(5) 次の文に含（ふく）まれる係りの助詞を書きぬきなさい。

聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。

［　　］